会場ガイド



国際芸術祭「あいち」地域展開事業
現代美術 in 犬山
Contemporary Art in Inuyama

旅の想像力
Imagination of Travelers

2026.11.14 sat 土曜日 - 12.6 sun 日曜日

10:00-17:00　月曜日休 *11月23日(月・祝)は開催　観覧無料

会場
犬山市羽黒地区[犬山市民文化会館・犬山市南部公民館、旧加茂郡銀行羽黒支店復原施設(小弓の庄)、坂野書店、羽黒駅構内旧喫茶店]、犬山市役所

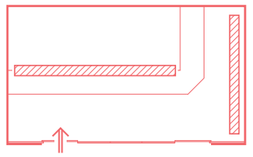
主催
国際芸術祭「あいち」地域展開事業実行委員会、犬山市

木曽川沿いの丘上に立つ犬山城の天守の姿は、かねてから人々の心をとらえてきました。犬山を旅した江戸時代の儒学者荻生徂徠(おぎゅうそらい)は、その姿を唐の詩人李白が詠んだ白帝城と重ね合わせたと伝えられます。一方、犬山を旅した明治・大正時代の地理学者志賀重昂(しげたか)は、丘上に犬山城の見える木曽川を、ヨーロッパのライン川のようだと称賛しました。
見知らぬ土地への旅は、人々の想像力をかき立て、さまざまな連想を促しながら、ときに現実から理想の世界への扉を開きます。この展覧会では、国内外で活躍するアーティストたちが、それぞれの想像力を巡らせながら、犬山市羽黒地区の文化施設やまちなかの会場に作品を展開します。そこに繰り広げられる理想の世界は、驚きや発見を促したり、笑いを誘ったりしながら、私たちに現実を見つめ直すきっかけを与えてくれるかもしれません。

問合せ
国際芸術祭「あいち」地域展開事業実行委員会事務局
名古屋市東区東桜1-13-2　愛知芸術文化センター内　TEL:052-971-0622
犬山市民文化会館・犬山市南部公民館
犬山市羽黒摺墨11番地　TEL:0568-67-2411

A 羽黒駅構内旧喫茶店

1965年に博物館明治村が羽黒駅の東側に開館すると、羽黒駅は翌年から1985年までのあいだ「明治村口駅」と改称されて、明治村に向かうバスへの乗換駅としての役割を担いました。駅の構内に設けられたこの小さな喫茶店は、地元住民や明治村へのバスの出発を待つ人々で賑わったといいます。

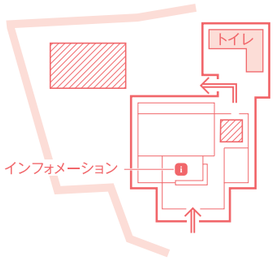


西尾秋乃 *NISHIO Akino*
1998年生まれ、岐阜県出身

西尾は自ら撮影したデジタル写真のコラージュをもとに映像作品を制作しています。出品作のひとつ《めぐり雑景図》は、自身の生活圏内で撮影した写真をコラージュした画像の連作《かさね雑景図》(2022年)を発展させた映像作品です。加えて本展では、犬山市の羽黒地区を撮影した写真を素材とする映像作品も発表します。
もともと「糊付け」を意味するコラージュは、別々の文脈に置かれているイメージを引き合わせ、新たな意味や価値を生じさせたり、それによって私たちの現実に対する認識を一新させる、主に平面上の手法として、20世紀の初頭からさまざまに実践されてきました。
コラージュの歴史を引き継ぎながら、西尾はそれを高精細なデジタル映像へと発展させました。普段は特別な注意を払われることのない「雑景」のなかの物体たちは、予想されない出会いを通じて新たな秩序を構成し、また解体されて別の秩序を再構成していきます。その様子は、私たちの日常的な意識のありようから開放された「雑景」の物体たちが、おのずから世界を構成しているような感覚を与えます。

B 旧加茂郡銀行羽黒支店 復原施設(小弓の庄)

明治40年代(1907-1912年)に銀行の支店として建設されたこの擬洋風建築は、1930年にその役目を終えて個人の所有となりました。1990年代に取り壊しが検討されましたが、地元住民の要望を受けて犬山市が解体・復原を行い、現在は羽黒地区のまちづくり拠点として活用されています。

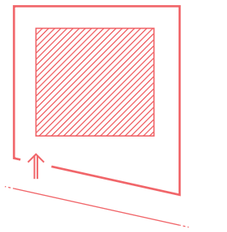


五月女かおる *SOTOME Kaoru*
1996年生まれ、栃木県出身

巧妙に作り出された五月女の作品は、生き生きとした犬の様子を想像させます。ただ、目の荒い金網と、滴り落ちる樹脂を素材として構成されたその姿は、現実の犬と見た目がよく似ているとは言い難いでしょう。彼女の作品と対峙するとき、私たちの意識は、触れるとやわらかくて暖かい犬の記憶と、眼の前の素材が持っている、触れると冷たくて痛そうな金網の感じや粘りのある樹脂の質感とのあいだを、絶えず往復することになります。
そのとき、私たちは「見る」という行為が、経験や記憶と、記憶を総合して心のなかに像を結ぶ力としての想像力と、いかに密接に関わり合っているかに気づくはずです。本来なら制作には不向きと思われる素材を用いることで、曖昧なまま残された犬の輪郭が、私たちの心のなかにある犬の姿を作品に投影する余白を生み出しているのでしょう。五月女の作品は、「見る」という日常的な行為が、いかに主観的であり能動的であるかを教えてくれます。

C 坂野書店

約60年前、もともと岐阜で教員をしていた初代が羽黒に嫁いできた際、金物などを扱ってきた商店を買い取って、坂野書店を開店しました。
時代の流れに合わせ、現在は店舗販売をしていませんが、配達による外商のほか、犬山市などの学校向けに教科書を取り扱っており、春頃には店が教科書でいっぱいになります。

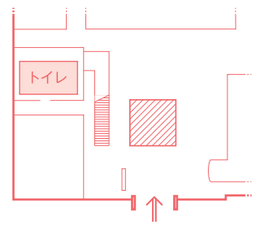


村上慧 *MURAKAMI Satoshi*
1988年生まれ、東京都出身

コンビニには3000点近くの商品が並んでいます。村上はそこから無作為に選び出した商品を、パッケージから取り出して10×20cmの透明な袋に収め、素材の色にしたがって並べ直しました。さて、私たちは書店を転用したこの架空の店舗で、コンビニで商品を吟味するように、これらのモノを吟味できるでしょうか。
丸裸にされ、商品陳列という体系からも外された商品は、もはやそれが食品であるか否かも判断できないかもしれません。村上は商品を徹底してモノとしての性質にしたがって扱うことで、逆説的に消費社会のありようを顕在化させているようです。パッケージに包まれて差異化されることで、モノは記号化した商品として店頭に並び、私たちに消費社会の一員となることを求めます。商品の消費を通じて、モノだけでなく付随するさまざまな意味も引き受けることになるのです。村上はそのことを批判するわけでも、称賛するわけでもなく、まるで研究者のような客観的な方法で、私たちが日々消費している商品が、本来はモノに過ぎないことをまざまざと提示しています。

E 犬山市役所

1954年、犬山町、城東村、羽黒村、楽田村、池野村が合併するかたちで犬山市が誕生しました。現在の犬山市役所は、犬山市誕生の翌年に建設された旧市役所の跡地に、2009年に建てられたものです。エントランスの吹き抜け空間では、さまざまな展示が行われています。



五月女かおる *SOTOME Kaoru*
1996年生まれ、栃木県出身

協賛
ニッショー　MEITETSU
株式会社あいち銀行／犬山金融懇話会／犬山動物総合医療センター
株式会社今仙電機製作所／株式会社カトージ
河村電器産業株式会社／桑原木材株式会社／株式会社島由樹脂
株式会社スペース／有限会社ちゆき園／東洋ファイン株式会社
社会福祉法人ともいき福祉会／株式会社名古屋銀行
名古屋競馬株式会社／日本紙工業株式会社／株式会社フクトミDBK
株式会社三菱UFJ銀行／株式会社森藤組／安田電業株式会社
株式会社横井包装

会場協力　興禅寺／TOCOS Inuyama Heritage Stay／坂野書店／名鉄羽黒駅

助成　文化庁　令和8年度 文化庁 文化芸術創造拠点形成事業
社会創造アーツファンド　[公社]企業メセナ協議会

アンケートにご協力ください
今後の地域展開事業の参考とするため、下記の二次元コードから、ぜひご感想をお聞かせください。

旅の想像力
Imagination of Travelers

開催概要
2026年 11月14日(土)–12月6日(日)
10時–17時
月曜日休 *11月23日(月・祝)は開催

会場

A 羽黒駅構内旧喫茶店
(犬山市大字羽黒字古市場75–1) 羽黒駅構内

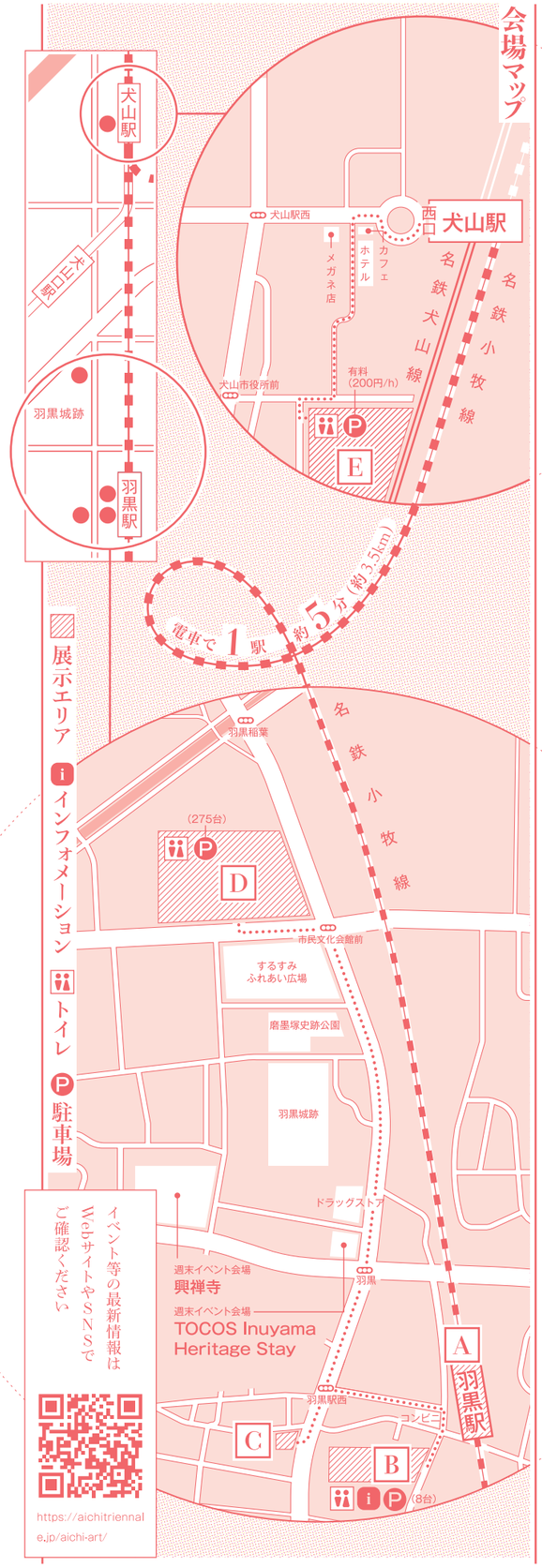
B 旧加茂郡銀行羽黒支店復原施設(小弓の庄)
(犬山市大字羽黒字古市場53–1) 羽黒駅から徒歩約1分

C 坂野書店
(犬山市大字羽黒字神明11) 羽黒駅から徒歩約3分

D 犬山市民文化会館・犬山市南部公民館
(犬山市羽黒摺墨11) 羽黒駅から徒歩約10分

E 犬山市役所
(犬山市大字犬山字東畑36) 犬山駅西口から徒歩約5分

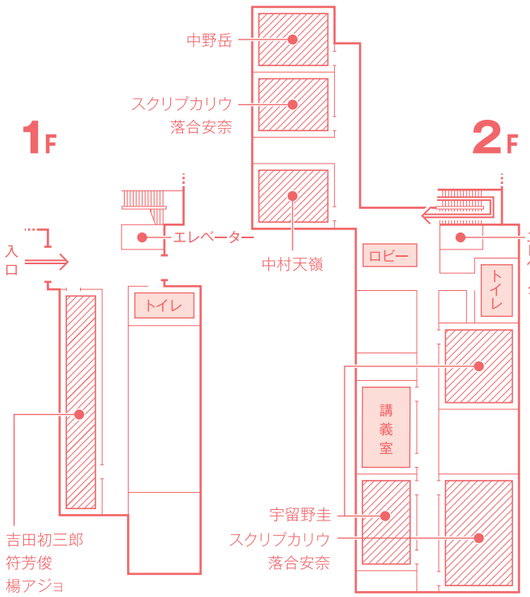
会場マップ



会場・作家解説

D 犬山市民文化会館・犬山市南部公民館

1982年に犬山市によって開館した市民文化会館は、大規模なコンサートや演劇が可能な1230席の大ホールを備えています。2年後に開館した南部公民館は、地域の生涯学習施設として、小ホール、会議室、展示室などを備えており、いずれも文化活動の拠点として地元の人々を中心に活用されています。



吉田初三郎 *YOSHIDA Hatsusaburo*
1884年生まれ1955年没、京都府出身

関西美術院で洋画家の鹿子木孟郎に学んだ吉田は、鹿子木から商業美術の道を勧められて、1913年に京阪電車のために鳥瞰的な沿線案内図《京阪電車御案内》を制作しました。以来、鉄道会社、自治体、旅館などから依頼を受けて数多くの鳥瞰図を描き、「大正の広重」と呼ばれるようになります。

吉田は1923年の関東大震災で被災して東京のアトリエを失い、名古屋鉄道から犬山の継鹿尾山麓の保養施設「蘇江倶楽部」の提供を受けました。それから1936年まで、彼は犬山を拠点として制作を続け、木曽川と犬山城の見える犬山の景色を、長江と白帝城の見える中国の風景や、ラインの見える犬山の魅力を伝えていきました。李白の詩の冒頭「朝に辞す白帝彩雲の間」からその名を取った旅館「彩雲閣」のために制作された《彩雲閣御案内》では、犬山城が「白帝城」と表記され、継鹿尾山の寂光院に納められた鳥瞰図は、《日本ライン図絵》と題されています。

符芳俊 *HOO Fan Chon*
1982年生まれ、マレーシア・セランゴール州出身

「白帝城」という犬山城の別名は、江戸時代の儒学者狩生徂徠が与えたとされます。それは、唐の詩人李白が、両岸から猿の声が響くなか、長江の急流を下った様子を詠んだ「早に白帝城を発す」に由来します。第三世代の中国系マレーシア人としてこの詩に親しんできた符は、3つの試みから成る《猿声啼いて住まず》で、犬山の人々を介して李白の世界に接近します。彼の関心は、詩それ自体よりも、それがどのように犬山の人々に親しまれてきたかにあります。

1つ目の試みは、犬山にいる猿の声を録音して、李白が聞いた音を創造的に再現した音響作品です。2つ目は、中国の書の訓練を受けてきた符が、日本の書家の協力を得て、日本の書の様式で李白の詩を書く試みです。3つ目は、犬山の観光ガイドへのインタビューです。受け手は李白の詩と犬山の結びつきについて問われ、任意の言語で詩を詠むよう依頼されます。これらの試みは、李白の詩が唐の時代から、犬山城の別名の名付け親である徂徠、その名を今日も伝え続ける観光ガイドを経て、符へと受け継がれていく様子を追ったものです。

楊アジョ *YANG Yashu*
1988年生まれ、中国・福建省厦門出身

楊は中国で絵画制作を学んだのち、愛知県内の2つの大学で日本画を学び、現在は関東を拠点として制作を続けています。彼女が一貫して関心を寄せているのは、東洋の絵画に認められる時間の表現です。本来は静止している絵画の画面に、いかに時間を表現するかという問いは、楊にとって、この世界をどのように捉えるかという問いと結びついています。この問いに向き合うために、中国や日本の古典的な絵画の技法や様式を参照し、それらを現代の日本画の文脈のなかで再構成しています。

作品の主題は、日本の昔話「桃太郎」であったり、王羲之(おうぎし)の「蘭亭序」に記された、名士たちが曲がりくねる水の流れに盃を流しながら詩を詠んだ、という中国の故事であったりします。ただ、それらの場面に京都・大徳寺真珠庵の《百鬼夜行絵巻》から鬼の姿が引用されるように、楊の描き出す主題は、その技法や様式と同様に一筋縄ではいきません。彼女の描く作品は、中国と日本という地理的な距離や、千年以上の時間を飛び越えて縦横無尽に駆け巡るのです。

中村天嶺 *NAKAMURA Amane*
2002年生まれ、岐阜県出身

中村の絵画の題材となるのは、身の回りの風景や人物であり、本来ならそれは日常のひとコマに過ぎません。しかし、見慣れているはずの日常は、ひとたび彼女の絵画のなかに表現されると、見知らぬ世界として私たちの前に現れてきます。

自身の絵画の源泉のひとつは、登場人物の内面を象徴するアニメの背景美術にあると中村は語ります。実際に彼女の絵画では、本来なら感情移入の対象とはならないはずのもの、木々や空などの自然物や、建物や柵などの人工物ですら、すべてがある種の気分や感情をともなって現れてきます。

中村がもうひとつの源泉として挙げるのは、ボッティチェリをはじめとする初期ルネサンスの絵画です。全体が均一な光に満たされたボッティチェリの絵画では、定められた時間の流れのなかで展開するアニメとは対照的に、観者は全体と部分を往復しながら視線を移すことができます。中村の絵画もまた視線の推移を制限しません。私たちは彼女によって命を吹き込まれたこの世のすべてに対し、ゆっくりと耳を傾けることができるのです。

宇留野圭 *URUNO Kei*
1993年生まれ、岐阜県出身

宇留野は2021年から継続して、「部屋」をモティーフとする立体作品を制作しています。《40の部屋》では、「部屋」に擬された40個の箱が、互いにダクトで接続されています。ダクトに取り付けられたいくつものファンが空気を循環させ、パイプオルガンのような構造を通して音を生じさせます。タイマーで制御されたファンの動きに応じて、それぞれの音は鳴ったり止んだり、音程を変化させたりしながら、うねりをともなう不協和音を奏で続けます。

部屋の内部は、清潔で明るい空間として整えられていますが、それとは対照的に、密接に連動する全体の複雑な構造は、計画性や堅牢性よりも、偶発性や脆弱性を強調しており、奏でられる不協和音は心地良さよりも不安を感じさせます。それは都市の縮図のようでも、巨大なシステムの象徴のようでもあり、さまざまな連想を呼び起こします。

もうひとつの出品作《6の台所》は、本展の会場となる犬山の環境に着想を得て、新たに制作された作品です。本作では、一転して「部屋」それ自体が崩壊の危機に瀕しており、私たちはその内部に立ち入ることを求められます。

スクリプカリウ落合安奈 *SCRIPCARIU-OCHIAI Ana*
1992年生まれ、埼玉県出身

日本を母国とする母と、ルーマニアを母国とする父のあいだに生まれたスクリプカリウ落合は、2つの母国に根を下ろす方法を模索しながら、「土地と人の結びつき」をテーマに制作を続けてきました。

日本で生まれ育った彼女にとって、ルーマニアという遠く離れた土地は、確かに自らの一部ではありながら、実体感のない想像上の世界でした。《ひかりのうつわ》は、彼女が実際にルーマニアに滞在し、その文化を自身の手で獲得し直す旅のなかで撮影された作品です。彼女の身体を通して感じ取られた、四季の光、空気、匂い、手触り、そして、その土地に生きる人々の息づかいまでもが、写真とそこに添えられた詩のなかに留められています。

ルーマニアを含む国内外のさまざまな土地の人々との出会いを通じて、彼女は文化人類学的なアプローチへの関心を強めていきました。《Mirrors》では、その関心を霊長類全般へと広げて、「サルの中にヒトをみて、ヒトの中にサルをみる」というリフレクションを、滲んで広がる墨のなかに描き出しています。

中野岳 *NAKANO Gaku*
1987年生まれ、愛知県出身

犬山市の羽黒地区やその周辺には、「虫送り」と呼ばれる風習が残っています。戦の最中に稲の切株に足を取られ、その隙に敵に討たれた平安時代後期の武将・斎藤実盛の怨霊が、稲を食い荒らす害虫となったという言い伝えにより、夏になると、馬に乗った実盛を模した藁人形を掲げ、それを村の境界まで「送る」儀式などが行われます。中野はこの虫送りに着想を得て、人間の自然への介入のあり方を問い直そうとします。

庭師でもある中野は、害虫防除を植物の健全性を維持するための合理的な技術として認めながら、虫送りを人間と自然を管理する側と管理される側に分けることなく、調停する営みとして位置づけます。そして、虫送りの精神の象徴的な実践として、ドローンを模した凧を制作しました。ドローンは撮影、輸送、戦争、農薬散布など、合理性を求める現代社会においてさまざまな用途に用いられます。中野はそうした機能をドローンから奪い、人間が自然を制御してきた歴史を巻き戻して、「風に委ねる」ことを思い出させる装置に変換します。